

リレーエッセイ

草刈会員からバトンタッチした事務局でグループウェア管理を担当している平野です。

さて、学校事務職員を組織する労組の役員を担って24年と3月を迎え10月から組織代表を担うこととなりました。9月までの4年間は単組書記長と関係上部団体の役員を担っていましたが、専従者を持たない(持てない)組織の書記長というのは自分で言うのも憚られますが、非常に多忙でありまして、さらに職場では、いわゆる事務職員の新たなミッション加配を受け、全国的にも評価をいただいていた子ども関連複合施設としての事務局を担い、同僚である新採用事務職員の指導をしながら、学校評価委員会の次席としても学校課題の解決に向けた具体的なアクションプラン策定に関わるなど、まるでバブル時代の栄養ドリンクのCMで有名な「24時間戦えますか」の世界でした。

毎朝6時20分に自宅を出て、往復2時間の通勤時間の合間にメールによる連絡調整・原稿書き、勤務時間終了後は連日の各種会議に集会参加、これは土日にもかなりの確率で入ってきます。21時過ぎに帰宅して、洗い物と翌朝の朝食準備(数少ないと妻に小言を言われる私の家事分担です)、24時過ぎには寝るようにしていましたが、50を過ぎて体力が落ちた中年にはなかなか厳しい生活でした。

別に忙しさ自慢をすることが本稿の目的では決してありませんし(入稿が遅れた言い訳にはしたいと思いますが)、この10月からは立場が変わりましたので、環境は大きく変化する予定です。

さて、私のこうした活動の原点は採用2年目くらいの時に地区の研究活動グループのリーダーを任されて学校徴収金の研究に関わったところにあります。

30年ほど前の話ですので、時効と思いますので包み隠さず書きますが、校内の予算編成で組み込めなかった教材等の購入希望について、やけにすんなりと引き下がるなと思ったら、後ほど教科実習費でどんどん買っていたという実態がありました。

採用間もなく学校の世界がよく分からない私でも、「この学校徴収金の位置付けと取り扱いはどうもおかしいぞ」と考えました。諸先輩に聞いても答えがまちまちのため、私たちは学校徴収金の予算編成と執行について、全市にアンケート調査を行うことを企画しました。

そこで中学校の教頭会と小学校の教頭会に挨拶と協力要請に行ったのですが、その一方の事務局長から「事務職員ごときが余計なことをするな、アンケートひとつでクビが飛ぶこともあるんだぞ(当時、市教委が行ったアンケートが大きな物議を醸し出した事件がありました)」と恫喝されてしまったのです。

結局、アンケートは行ったものの、事務処理的な内容を問うものに変更を余儀なくされ、分析結果も漠然とした周辺課題を提起するだけのものとなってしまいました。

20代前半の若者の慥然とした思いを拾い上げて運動に誘ってくれたのが、前々任の執行委員長(当時は書記長)でもある金野会員でした。

以降、学校徴収金については依然として大きな課題として私の前に立ちはだかっています。

準・要保護生徒の比率が6割を超える地域に勤務する現在、学校徴収金の督促対応や教育扶助に係る手続き支援で家庭訪問などを行う中で、子どもの貧困の実態と負の連鎖を目の当たりにしています。

私たち学校の事務職員が公費、私費を含めて学校財務を捉え直し、各学校の教育課程の編成段階からそれを裏付ける財源のあり方を含めて教員と共に検討し、公教育の無償化を見据えながら、財源確保と私費負担を段階的かつ具体的に減らしていく取り組みを進めていく必要性を痛切に感じています。

同時に、学校徴収金の課題のみならず、私たちは昨今の学校の高度化・複雑化する課題に対し、学校現場において教育職員とは違った視点と手法で、自治体の関係部署のネットワークを活用し、地域を含めた外部を巻き込んで、解決する役割を担うことがこれからの学校に勤務する事務職員に求められていると考えています。

そうした事を通して子どもたちの学びの質の向上に資することを目指し、そこに正当な評価と対価を求めていく、そのことは先に行った私たちの労組の定期大会でも運動の基軸の一つとして確認したところです。

私はそうした運動を率いるための理論的補強を、これからも会員の皆さんとの情報交流の中から得ていきたいと考えています。